

# 特集 2019年を占う



株式会社成岡マネジメントオフィス  
代表取締役 成岡秀夫（中小企業診断士）

いよいよ平成が終わり、新しい元号の時代に入ることになる2019年。東京オリンピックの前年だが、ラグビーのワールドカップもありスポーツ界は盛り上がるだろう。しかし、経済や景気の方が心配だ。10月には消費税の10%への増税も予定されている。混沌とした2019年の大きな動きをいくつか展望してみる。

## 消費税の増税

10月に予定されている消費税の増税。軽減税率の複雑さばかりが宣伝されているが、この本質は10%に増税しても、将来の年金原資不足は解消されないとということだ。いろいろな計算があり、前提をどう置くかで大きく異なるが、おおよそ20%くらいに増税しないと、日本国の将来の年金原資はもたないとされている。生産年齢人口が減少し、働き手が減っていくなかで、65歳以上の高齢者がどんどん増えていく。予防医学が発達し、生活習慣病の改善が進む中で、平均寿命は伸びていく。人生100歳はいいが、健康な状態で年を取るならまだしも、寝たきりになってからの人生はつらい。そうならないように、若いうちから自分の健康には極力留意して、時間を投資し、正常な状態を長く保てるようにしておかないといけない。増税は予定通り行われる可能性が高い。2回見送ったから、今回パスすると「私の顔も三度まで」となるから、国際公約を反故にするわけにはいかない。まして、将来のための増税だとはいえ、痛みを伴う改革だから安定した支持基盤がある現在がチャンスだろう。そう考えると、今回見送りになる可能性は皆無に等しい。ただし、参議院選挙の結果次第という側面もある。景気が冷え込まないために、政府はあの手この手と盛りだくさんに行策を並べている。補正予算を組んで切れ目のない対策と言っている

が、果たして効果はいかほどか。前回の5%から8%に上がったときの落ち込みほどではないと、楽観視する向きもあるが、意外とボディーブローのようにじわりじわりと効いてくるのではないか。消費者心理というのは微妙なもので、少しのことで心理的な動きは大きく揺さぶられる。大型の消費財の駆け込み需要はあるだろうが、あまり大きな影響はないかもしれない。それより軽減税率の適用、不適用でレジが混乱し、スーパーでの買い物のムダ時間が長引くことのほうが面倒だ。そのせいで消費税の増税が悪いという犯人探しになって、消費税そのものが悪役になる可能性がある。本末転倒とはこのことで、今回の増税は未来のリスクに対する手当なのだ。そこをきちんと宣伝広報しないと、この本質を見誤る。



消費税10%

## 米中貿易摩擦

米国と中国との貿易に関する、摩擦や軋轢が激しくなる。お互いに、ここまで来たら退くに退けないので、意地と見栄の突っ張り合いになる。特にトランプ政権は、中間選挙でじつは外交と貿易でポイントを稼いで、次の大統領選挙に備えようとするはずだ。

中国も一带一路政策を批判されることが多い、発展途上国を借金漬けにして主権を侵害しているとまで言われている。しかし、中国の政権基盤は盤石だから、そう簡単に振り上げた拳を下ろすことはないだろう。先進国の中間入りをして、世界第二の大國になった中国が、先頭を走る米国に果敢に挑んでいる様子は、歴史は繰り返すという諺を髣髴とさせる。過去に幾多の先進国と追い上げてきた発展途上国との争いは、不毛な戦争に発展したりして、世界にマイナスの遺産をもたらした。話し合いで解決できないぎりぎりのところに来てしまって、退くに退けない大国同士の意地の張り合いだから、誰かが仲裁しないといけないが、どうも行司役が出てくる気配がない。イギリスのメイ首相はEU離脱問題で混乱しているし、ドイツのメルケル首相も党首を辞任すると表明した。あと、頼りになるのはフランスか日本かもしれないが、日本は中国となかなかうまい関係に持ち込めない。

意外なところで、じわじわとこの米中貿易戦争の影響が出始めている。関税が高くなるため、中国での工場の生産をやめて、東南アジアへ生産拠点を移転したりする企業が出始めている。ベトナムかタイ、またはマレーシアかインドネシアというのが相場だったが、一足飛びにインドへ移転した企業もある。あるいは、輸出品に高い関税をかけられて四苦八苦している企業もある。自動車の米国への輸出の関税を高くするのは、いったんパスで折り合ったが、必ずしもこの中途半端な状態が未来永劫に続くとは思えない。対米輸出で稼いでいた企業が、今後どうなるのかは極めて不透明な状態だ。な

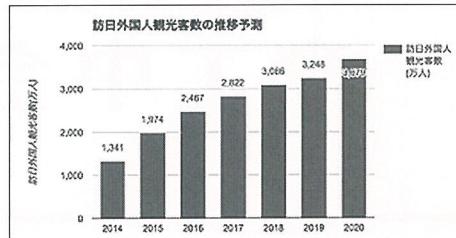


米中貿易摩擦

にせ、大人同士がまともに喧嘩しているから、何かのきっかけで和解の可能性もあれば、長期に喧嘩が続く可能性もある。筆者の見立てでは、この貿易戦争は長期化し、最終的に誰も勝者がいないドローボードになるだろう。最後の落としどころは、まだ見えないがこの1年で決着がつくほど、ことはそう簡単ではない。あらゆる中小企業で、この米中貿易戦争で影響のない企業はないはずだ。小さい、大きいは別にして、何らかの影響は必ずこれから現れる。呑気に構えて関心を持たないのではなく、明日は我が身と危機感を持っていた方がいい案件だ。もし、この状態がこれから数年続くならどうするか。あるいは、今なら先手を打って行動を起こした方がいいなら、動くべきだ。ことが煮詰まって、膠着状態になると動きにくい。経営者の決断が迫られる場面が来る可能性が高い。

## まだ伸びるインバウンド

まだ多くのクレーンが林立している京都市内。そのほとんどがマンションかホテルだ。テナントビルは四条烏丸の経済センターくらいだろう。先日の京都新聞の報道によれば、京都市内のホテルの部屋数が4万室を超えて、いまの計画通りであれば近い将来5万室を超えるという。これは部屋数としては完全に過剰状態であり、淘汰の時期が早晚来るのではないかという懸念が書いてあった。インバウンドの外国人観光客の入数は、いまだに増加傾向でありシーズンには市内に外国人観光客が溢れている。しかし、従来の通り一遍のおきまりコースから外れて、市民の我々でも知らない隠れた観光スポットに行く人が増えてきた。また、コト消費と称して体験型の観光を志向する人も多い。京都市内の夜は観光客にはつまらないという悪評を挽回すべく、いろいろな寺院や神社でナイトツアーや行ったり、アウトドアのイベントも盛んになっている。まだ工夫の余地はたくさんありそうだ。大阪万博も決まったことだし、当面この傾向は続くだろう。下京区の中央市場周辺も、どんどん景色が変わっている。七条通りをまたいで新設のJRの駅舎もおおよその概観がわかるようになってきた。多くの観光客が来るからと、あぐらをかくのではなく、リピーターになってもらい熱烈な京都ファンをもっと増やすにはどうすればいいか。みんなで知恵を絞らないといけない。



訪日外国人観光客数予測

## 人手不足は続く

昨年くらいから、人手不足の声が日増しに増えてきている。先日は、有名な飲食店が人手不足で閉店した。マスターに言わすとホールと調理場での人手が圧倒的に不足している。有名な店なので、特にランチタイムは行列ができるのだが、人手が足りないので待ち時間は長いし、オーダーしてもなかなか料理が出てこない。ファンはサービスの低下を嘆いて、リピーターが離れていく。そういう状況はしのびないので、思い切って閉店を決断した。このように人手不足で閉店や休業、廃業に追い込まれるお店が目立つようになってきた。

製造業では以前から、もっと深刻な人手不足が続いている。受注は大量にあるが、やってくれる人がいないので、納期がどんどん遅れしていく。従来数日で納品できた製品が、最近では1週間以上かかる。得意先に事情を説明し、一応の理解納得は得られているが、これもいつまで我慢してくれるか分からない。辛抱にも限度があるので、あまり当方も無茶は言えない。外国人労働者の受け入れが国会で議論され一定の成果を見た。しかし、これが根本的な解決に結びつかないのは、実は誰もがわかっている。しかし、一時的にせよ何とか労働力を確保して、一定の仕事がこなせるようにしておかないと、どうしようもない。

特に、製造業、工事業、建設業、飲食業あたりの職種では非常にタイトな状態が続いている。丹後地方の某宿泊業では、この状態を数年前から見越して、環境を整え20名近くのベトナムからの研修生を受け入れている。彼ら、彼らが数年間日本で働いて、いい思い出や印象を母国に持ち帰り、また友人がそれなら行ってみたいと「選ばれる国」にならないといけない。一時期の使い捨てイメージでは、継続していい人材が日本に来てくれることも難しいし、何より将来に向けてプラスにはならない。これを経営者は肝に銘じて、単なる一時的な働き手であり人数合わせだと思わないことだ。国際貢献、国際交流の一環で、貴重な戦力を預かってまさに技能や技術を習得して、母国の経済発展に寄与し貢献するんだという、高い理想の実現に協力するというイメージを持たないといけない。



人手不足

## 経済センター竣工落成移転

いよいよ、四条室町に永年の京都経済界の念願であった「京都経済センター」がオープンする。2月くらいから移転が始まり、3月にかけてピークになる。ここに京都経済を支えるいろいろな機関や法人が一堂に会することは、非常に意義がある。とにかくビジネスは人ととの関係で始まり、動き、結果が出るから、この同じ場所にいることは非常に大きい。また、近くには京都の3大金融機関があり、京都府庁、京都市役所とともに非常にアクセスが良くなる。この京都経済センターが起爆剤になり、人の交流が活発になり、いい意味の摩擦と葛藤から新しいビジネスが立ち上がる予感がしてならない。みんなワクワクしている。



京都経済センター